

## 資本主義的生産の基本的矛盾と資本主義の根本矛盾

### 資本主義的生産の基本的矛盾

#### ①剰余価値が生産される諸条件と剰余価値が実現される諸条件とのあいだの矛盾

——資本主義的生産にとっての法則性と資本主義的生産の矛盾—— **重要!!**

「けっして忘れてならないのは、この剰余価値の生産——そして剰余価値の一部分の資本への再転化すなわち蓄積はこの剰余価値生産の不可欠な一部分をなしている——が資本主義的生産の直接目的でもあれば規定的動機でもあるということである。それだから、この資本主義的生産を、そうではないものとして、すなわち享樂を直接目的とする生産とか資本家のための享樂手段の生産とかいうものとして描いてはならないのである。そんなことをすれば、それは、資本主義的生産の内的な核心的な全姿態のなかに現れるその独自の性格をまったく無視することになるのである。……しかし、社会の消費力は絶対的な生産力によっても絶対的な消費力によっても規定されていない。そうではなく、敵対的な分配関係を基礎とする消費力によって規定されているのであって、これによって社会の大衆の消費は、ただ多かれ少なかれ狭い限界のなかでしか変動しない最低限に引き下げられているのである。社会の消費力は、さらに蓄積への欲求によって、すなわち資本の増大と拡大された規模での剰余価値生産とへの欲求によって、制限されている。これこそは資本主義的生産にとっての法則なのであって、それは、生産方法そのものの不断の革命、つねにこれと結びついている既存資本の減価、一般的な競争戦、没落の脅威のもとでただ存続するだけの手段として生産を改良し生産規模を拡大することの必要によって、与えられているのである。それだから、市場は絶えず拡大されなければならないのであり、したがって、ますます市場の諸関連もそれを規制する諸条件も生産者たちからは独立な自然法則の姿をとるようになり、ますます制御できないものになるのである。内的な矛盾が生産の外的な場面の拡大によって解決を求めるのである。ところが、生産力が発展すればするほど、ますますそれは消費関係が立脚する狭い基礎と矛盾してくる。このような矛盾に満ちた基礎の上では、資本の過剰が人口過剰の増大と結びついているということは、けっして矛盾ではないのである。なぜならば、この両方をいっしょにすれば、生産される剰余価値の量は増大するであろうとはいえ、まさにそれとともに、この剰余価値が生産される諸条件とそれが実現される諸条件とのあいだの矛盾は増大するのだからである。」

⑦-[100]P127-129の下線部 (大月『資本論』第3巻 第1分冊 ④Ⅲ P306-7)

※HP「C、資本主義社会Ⅰ」の「8-14 剰余価値の生産が資本主義的生産の直接目的でもあれば規定的動機でもある」を含む。

#### ②資本主義的生産の基本的矛盾と資本主義

「一方では、生産力の無拘束な発展、および、同時に諸商品から成っていて現金化されなければならない富の増加、他方では、基グルントラーゲ礎として、必需品への生産者大衆の制限、という基本的矛盾」(『剰余価値学説史』Ⅲ、レキシコン⑦-[137]P251)

※HP「F、資本主義社会Ⅳ」の「19-20 恐慌の究極の根拠は」及び「19-22 資本の過剰生産と商品の過剰生産の法則」も参照!!

## 資本主義の根本矛盾

### ①資本主義の根本矛盾

「資本家があらわれる。生産手段の所有者としての資格で、かれは生産物をも取得して、それを商品にする。生産は社会的行為になる。交換とともに取得はひきつづき個人的行為、すなわち個々人の行為である。社会的生産物は個々の資本家によって取得される。これが根本矛盾であり、そこから、今日の社会がそのなかで動いているすべての矛盾、そして大工業があかみだすすべての矛盾が発生するのである。

A 生産手段からの生産者の分離。労働者は終身の賃労働を宣告される。プロレタリアートとブルジョアジーの対立。

B 商品生産を支配する法則がますます表面にあらわれ、ますます作用をつよめる。……」  
(『空想から科学へ』新日本文庫 P73)

### ②分配関係と生産諸力とのあいだの矛盾と対立

「だから、いわゆる分配関係は、生産過程の、そして人間が彼らの人間的生活の再生産過程で互いに結び結ぶ諸関係の、歴史的に規定された独自に社会的な諸形態に対応するのであり、またこの諸形態から生ずるのである。この分配関係の歴史的な性格は生産関係の歴史的な性格であって、分配関係はただ生産関係の一面を表しているだけである。資本主義的分配は、他の生産様式から生ずる分配形態とは違うのであって、どの分配形態も、自分がそこから出てきた、そして自分がそれに対応している特定の生産形態とともに消滅するのである。

ただ分配関係だけを歴史的なものとして生産関係をそういうものと見ない見解は、一面では、ただ、ブルジョア経済学にたいするすでに始まってはいるがしかしまだとらわれている批判の見解でしかない。しかし、他面では、この見解は、社会的生産過程を、変則的に孤立した人間がなんの社会的援助もなしに行なわなければならないような単純な労働過程と混同し同一視することにもとづいている。労働過程がただ人間と自然とのあいだの単なる過程でしかないかぎりでは、労働過程の単純な諸要素は、労働過程のすべての社会的発展形態につねに共通なものである。しかし、この過程の特定の歴史的な形態は、それぞれ、さらにこの過程の物質的な基礎と社会的な形態とを発展させる。ある成熟段階に達すれば、一定の歴史的な形態は脱ぎ捨てられて、より高い形態に席を譲る。このような危機の瞬間が到来したということがわかるのは、一方の分配関係、したがってまたそれに対応する生産関係の特定の歴史的な姿と、他方の生産諸力、その諸能因の生産能力および発展とのあいだの矛盾と対立とが、広さと深さとを増したときである。そうならば、生産の物質的発展と生産の社会的形態とのあいだに衝突が起きるのである。」

(『資本論』第3巻 第2分冊、大月版『資本論』⑤ P1128B7-1129B1)

## 資本主義的生産の基本矛盾と資本主義の根本矛盾

マルクスは資本主義的生産の矛盾について二つの矛盾を述べており、一つは資本主義生産に内在する矛盾で「基本的矛盾」といい、もう一つは分配関係・生産関係と社会的生産力とのあいだの矛盾と対立で、エンゲルスのいう「根本矛盾」です。この「根本矛盾」が「生産の社会的性格と取得の資本主義的形態の矛盾」、つまり「資本主義的生産様式の矛盾」であるからこそ、資本主義的生産様式は社会的生産力発展の「桎梏」となるのです。

マルクスの言う「基本的矛盾」とは、資本主義生産に内在する矛盾。

マルクスは、資本主義的生産の矛盾について、『資本論』第3巻 第1分冊(大月『資本論』④ P306-7)で、①「社会の消費力は、さらに蓄積への欲求によって、すなわち資本の増大と拡大された規模での剰余価値生産とへの欲求によって、制限されている。これこそは資本主義的生産にとっての法則」であり、資本主義的生産には「剰余価値が生産される諸条件とそれが実現される諸条件とのあいだの矛盾」があることを述べ、『剰余価値学説史』Ⅲ(レキシコン⑦-[137]P251)では、②「一方では、生産力の無拘束な発展、および、同時に諸商品から成っていて現金化されなければならない富の増加、他方では、<sup>グルントラーゲ</sup>基礎として、必需品への生産者大衆の制限、という基本的矛盾」と述べています。

①「社会の消費力は、資本の増大欲求によって制限されている」。①剰余価値が生産される諸条件(資本の増大欲求によって作り出される諸条件)＝「計画的に+安く+より多く作る」と②それが実現される諸条件(消費の諸条件)＝「無計画で+利益の極大化+制限された最終需要」とのあいだの矛盾。

②一方の無政府的に拡大される生産と無政府的に増大する諸商品と他方の生産者大衆の制限された最終消費という基本的矛盾。

①と②は、基本的に同じことを述べており、これは、資本主義が存立する中で、資本主義が抱えている「生産と消費」の矛盾であり、「恐慌」はその一時的な解決手段です。

エンゲルスの言う「根本矛盾」とは、資本主義を終わらせなければ解決しない矛盾。

マルクスは、同時に、『資本論』第3巻 第2分冊(大月『資本論』⑤ P1129)で、③「一方の分配関係、したがってまたそれに対応する生産関係の特定の歴史的な姿と、他方の生産諸力、その諸能因の生産能力および発展とのあいだの矛盾と対立」について述べています。これが、エンゲルスの言う「根本矛盾」です。

③一方の分配関係、それに対応する生産関係の特定の歴史的な姿(＝私的資本主義的分配と資本主義的生産関係)と、他方の生産諸力、その諸能因の生産能力および発展(＝社会化された生産力とその一つ一つの生産能力およびその発展可能性)とのあいだの矛盾と対立。これは、資本主義を終わらせなければ解決しない資本主義的生産様式がもつ根本矛盾です。「取得の資本主義的形態」を自由にさせれば、「生産の社会的性格」は歪められ生産者自体を貧困に陥れ、「生産の社会的性格」をすべての社会の成員の豊かな生活のために発展させようとするれば、「取得の資本主義的形態」は影を潜めなければなりません。あい対立し、矛盾しています。だから、エンゲルスは「生産の社会的性格と取得の資本主義的形態」を資本主義的生産様式の根本矛盾と言っています。